化石　83，11-14，2008
Fossils
The Palaeontological Society of Japan

博物館ネットワークと古生物学のアウトリーチ　－巡回展の試み－

籔本美孝
北九州市立自然史歴史博物館

Museum network contributes to paleontological outreach -Attempts through traveling exhibitions-

Yoshitaka Yabumoto
Kitakyushu Museum of Natural History and Human History, 2-4-1 Higashida, Yahatahigashi-ku, Kitakyushu, Fukuoka 805-0071 (yabumoto@kmnh.jp)

はじめに

特別展，企画展は博物館にとって重要な教育普及活動の一つであろう．国内の自然史系博物館では，館によって異なるが年１回から数回の特別展，企画展を開催している．館所蔵の標本に基づいて計画するもの，所蔵標本に他館からの借用標本を併せて企画するもの，新聞社等の主催する巡回展を受け入れる場合など，内容や開催形式は多様である．

博物館が独自に開催する展示会は，自前の標本だけで行う展示会であれ，借用標本による展示会であれ，自館での一回きりの展示会で終わることがほとんどである．一方，新聞社等が主催者に加わる展示会は，少なくとも４会場から５会場をほぼ１年間で巡回するというものが多い．期間が限られるのは，標本を海外や国内の博物館，研究所などから借用しているためである．

いずれの展示会においても，博物館はその立ち上げに労力と時間，費用をつぎ込むことになるが，巡回しない単独展の場合は，長くても夏休み期間中の１ヶ月半から２ヶ月間程度の開催期間であり，入場者数もそれほど多くは見込めない．学芸員としては，相当の労力と時間をかけた展示会を短期間で終わらせる，あるいは１館のみで終わらせるということに納得のいかないところもある．

ここでは，自然史系博物館の巡回展のあり方についていくつか例をあげ，将来の可能性について検討したい．

図１．中国浙江省博物館および中国科学院南京地質古生物研究所と連携して行なった展示会．展示会の開催と同時に標本収集を行なってきた．

展示会と標本収集

筆者が勤務する博物館は，北九州市内で白亜紀の淡水魚類化石が発見されたことを契機に設立された．1976 年と 1977 年の２回にわたって発掘調査が行われ，1978 年に戸畑区に博物館開設準備室が設置され，３年後に国鉄八幡駅ビル内の仮施設で北九州市立自然史博物館としてオープンした．そして，2002 年に現在の新館が完成するまでの 21 年間，年３回の特別展あるいは企画展を行ってきた．また，展示会の開催に当たっては，その都度標本購入の予算を計上し，開催経費のほとんどを標本購入に当ててきた．すなわち展示会をする度にコレクションが増えていったことになる．古生物関係では，特に白亜紀の魚類化石の収集に努め，これまで２回の白亜紀の魚類に関する展示会を行った．また，中国の浙江省の博物館および中国科学院南京地質古生物研究所と連携して，中国の化石展を開催し，これに併せて多くの中国産化石を収集した（図１）．古生物以外では，同様の方法で昆虫標本を収集し，多くの寄贈標本も含め，現在では昆虫コレクションの充実度では日本でも有数の館に数えられている．

これまでの巡回展

当館がこれまでに関係した巡回展は「日本の魚学・水産学事始め　フランツ・ヒルゲンドルフ展」と「恐竜時代の生き物たち」である．前者は化石と多くの現生の魚類や哺乳類の標本を展示し，明治のお雇い外国人学者ヒルゲンドルフを紹介するものであった．この巡回展は矢島道子博士が企画されたもので，数回の会合を経た後，フォッサマグナミュージアムを皮切りに，福島県立博物館，神奈川県立生命の星・地球博物館，北九州市立自然史博物館を巡回した．開催方法や経費負担については，それぞれの館の事情に合わせて調節するという自由度の高い運営方式がとられた（図 2）．

「恐竜時代の生き物たち」は手取層群産化石研究グループの研究成果を紹介するもので，千葉県立中央博物館の伊左治鎮司学芸員が企画立案した展示会であった（図 3）．なお，同館で平成 14 年 7 月から 10 月にかけて開催され，その後，群馬県立自然史博物館，北九州市立自然史・歴史博物館，地元松任市（現在白山市）の松任市立博物館の合計 4 カ所で開催された．標本は石川県白峰村（現在白山市）教育委員会から借用し，解説パネルなどは千葉県立中央博物館が作製した．

図 2.「日本の魚学・水産学事始め　フランツ・ヒルゲンドルフ展」は自由度の高い運営方式で国内 4 カ所を巡回した．

図 3．巡回展「恐竜時代の生き物たち」にあわせて出版された図録．展示会の図録としては珍しく出版社（晶文社出版）から発行され，一般の書店でも販売されている．この巡回展は石川県白山市桑島と岐阜県高山市荘川に分布する手取層群から産出する化石の研究成果を紹介するもので，千葉県立中央博物館を皮切りに国内数カ所を巡回した．

図 4.「世界最大の翼竜展」日本初の翼竜に関する展示会．北九州で立ち上げた展示会が国内 4 カ所を巡回する．

巡回展の試み

博物館が企画した展示会を巡回展とする場合，運搬や展示，撤収にともなう標本の破損や劣化というリスクを負わなければならない．昆虫標本や剥製標本に比べ化石の場合はそのリスクはやや少ないかもしれないが，一つしかないものであったり，標本によっては破損しやすいものもある．当然のことながら，標本選定もこのようなリスクの少ない標本を選ぶ必要があろう．館としては，他の地域を巡回することによって館や館の所属する公共団体の文化的，教育的情報発信につながるという理解であれば，他館への貸し出しもスムーズに行くのではないだろうか．

当館で 2007 年夏に開催した開館 5 周年記念「世界最大の翼竜展～恐竜時代の空の支配者」は，当館が企画した初の巡回展となった．これは国内の主要博物館の協力も得て，大手新聞社が巡回展とし，当館を含めて全国 5 カ所で開催される．この展示会では，目玉となる世界最大の翼竜標本を当館が提供するとともに，中国から最近発見された初公開の翼竜化石も展示した（図 4）．また，2008 年夏に開催する「シーラカンス，大陸移動の証人たち（仮題）」でも，当館が世界最大のシーラカンス化石を復元し，本展示会の目玉とする予定である．後者は展示品のほとんどが当館所蔵標本で構成されるため，数年間の巡回展を考えている．

巡回展の提案

ほとんどの博物館では運営予算が年々厳しさを増し，展示会開催費は年々削られる傾向にある．それぞれの館が単独で行っている展示会を他館に提供する仕組みを作ることができれば，教育的効果の向上が期待できるとともに経費，労力の節減にもなるであろう．そのためには借用するばかりでなく，互いに提供し合うことが必要になってくる．

例えば，美術館等では，すでに二つの館が持っているコレクションを交換し，互いに展示会を行っているところもある．

図 5．ヘッセン州立博物館（Hessisches Landsmuseum Darmstadt）．

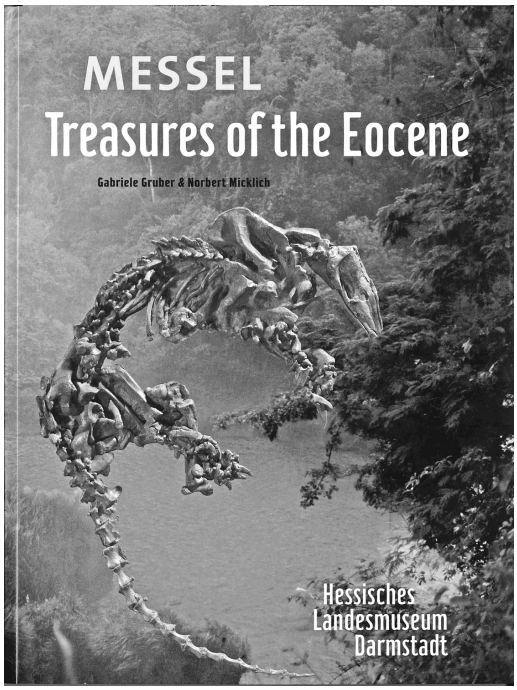

図 6．ヘッセン州立博物館の巡回展，同館の調査研究を基にしたメッスル産始新世の化石展で，世界各地を巡回する．メッスルの化石産地はユネスコの世界遺産でもあり，4,700 万年前の保存のよい化石が産出することで有名である．特に哺乳類の化石は，その多様性と保存のよいことで知られている．2007 年 5 月 29 日から 9 月 30 日までヘッセン州立博物館で開催され，その後，2011 年までオランダ，ノルウェー，スイス，アメリカなどを巡回する．

自然史系博物館でも，自館が持っていて他館が持っていないコレクションを互いに交換して，同時に展示会を行ったり，複数の館がコレクションを出し合って一つの展示会を立ち上げ，巡回するというようなことも可能かもしれない．

いずれにしても，それぞれの館および学芸員のネットワークが必要であり，それぞれの館がどのようなコレクションを所有し，どのような特別展や企画展を計画しているのかといった情報の共有も必要になってくるであろう．このような学芸員のネットワークができれば，将来海外から特別展を誘致する（図 5，6），あるいは海外へ特別展を巡回するというようなことも可能になってくるかもしれない．

謝辞

本稿をまとめるにあたり，千葉県立中央博物館および同館の伊左治鎭司博士には図録写真掲載を承諾いただき，ヘッセン州立博物館の Norbert Micklich 博士には巡回展の情報をいただくとともに写真の使用について許可いただいた．ここに記してお礼申し上げる．